

また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。黙示録 7:2a

日本を愛するキリスト者の会

第 20 号 (2021 年 9 月)

「日本を愛するキリスト者の会」 の「日本民族総福音化運動協議会」 (民福協)への合流について



当会事務局長
久保有政

会長・副会長不在となり

私たち「日本を愛するキリスト者の会」は、2015年以来、故・手束正昭師の信仰と掛け声のもと、年2回の講演会や、会報誌、動画配信その他を通し、活動してまいりました。その考え方は、

「世間から『反日左翼』と見られがちな日本のキリスト教会を軌道修正するためにも、とくに日本の近代史について、良い点も悪い点も正当に評価していきたい。そしてこの国への神の深いご愛を認識し、さらに、日本を『悪い国』として裁き目線で断罪するのではなく、神の御手の中にある日本の伝統文化/歴史を敬愛しつつ、宣教に励んでいく」

というものです。これは手束正昭著『日本宣教の突破口』に、余すところなく書かれております。この理念のもと、これまでの約10年間の活動は、至らないところもあったと思いますが、それなりの役目は果たすことができたと思っております。

しかし今年2月に、高齢ゆえのフレイル(虚弱)で伏しておられた手束正昭・副会長が召天し、さらにそののち三谷康人・会長も、高齢のためにこ

れ以上の会長職を辞退されました。そのため現在、当会は会長も副会長もない状態となっております。

そこで当会の今後について、今年4月に当会の理事会が持たれました。理事会では、同じ手束正昭師が設立なさった「日本民族総福音化運動協議会」(民福協)に、当会の合流をお願いすることが決まりました。

民福協が、日本を愛するキリスト者の会を吸収合併する形になります。6月の民福協の理事会でも、それが受け入れられ、承認されました。

民福協は、「文化適応の伝道」(文脈化)を趣旨の一つに掲げた伝道団体です。「文化適応の伝道」の精神は、日本を愛するキリスト者の会の趣旨にも通じるものですから、今後は民福協における伝道の一環として、日本を愛するキリスト者の会の伝道活動を続けていきたいと思っております。

もともと民福協の理事の中には、日本を愛するキリスト者の会の理事を兼任しているかたも少なくなく、私自身そのような兼任をしております。ほかにもそういう方々がおり、民福協と当会は、もともと通じ合っているものでした。

民福協と当会の両方で会員になっている方々も、少なくありません。そのような意味で、この合流は神様のご配慮と受けとめております。

民福協への合流

実際にどのような形で合流するかですが、当会はいったん、形の上では2025年3月末をもって解散となります(当会にお納めいただく年会費も、その年度末で終了となります)。

当会会員のかたは、ご自分の判断で、民福協にご参加いただきたいと思います。

民福協は賛同会員というかたちで、年会費はなく、自由献金で支えていくようになっていきます。会員のかたは、ぜひ積極的に民福協に参加し、伝道活動にご協力ください。

民福協への参加方法

民福協ホームページ



<http://minfukukyo.sun.bindcloud.jp/>

の「お問い合わせフォーム」から、参加希望をお伝えくださるか、

Tel 072-822-9232 Fax 072-822-9233
(レハイム・キリスト教会内)にお知らせください。

当会の理事も2025年3月末でいったん解散となりますが、今後、もし民福協からの求めがあり、かつ本人の承諾があれば、当会の理事が民福協の理事になることもあります。

また当会の会計に残高がある場合は、解散の時点で、民福協に全額献金されます。

当会のホームページは、民福協からリンクが張られる形で、連携されます。

以上のことを、今年10月19日(土)に東京の講演会の前にもたれる当会総会で、承認決議をしたいと思います。会員の方々のご協力をお願い申し上げます。

これまでの講演会活動（第一～第八回）

最後に、当会のこれまでの活動を振り返ってみたいと思います。

第一回の講演会(2015年)は、「大勢のユダヤ人難民を救ったもう一人の日本人 樋口季一郎」と題し、2万人ともいわれるユダヤ人難民を救った樋口季一郎・中將のお孫さんにあたる樋口隆一・明治学院大学元教授に、お話しいただきました。

また手束副会長が、「我らは何をなすべきか—精神的バビロニア捕囚からの解放に向かって」と題し、「日本は悪い国だった」という自虐史観から脱却することの重要性を、お話ししました。

これは東京の下町の会場で行った講演会でしたが、多くの来場者があり、会場では多大な反響がありました。

そののち**第二回**講演会は、手束正昭師が「謝罪運動のもたらす宣教論的問題性」と題してお話しくださいました。韓国人のいう歴史をそのまま鵜呑みして、日本の牧師が韓国で謝罪運動をすることなどがなぜ問題なのか、という内容でした。

また柴橋正直氏(現・岐阜市長、元・衆議院議員)も、「クリスチャンは歴史問題とどう向き合うべきか」と題して、歴史問題とのかかわり方について良き示唆を与えて下さいました。

第三回は、西岡 力・東京基督教大学教授が「キリスト者として日本を愛すること——慰安婦問題と拉致問題の現場から」をお話しくださいました。西岡教授は、北朝鮮の拉致被害者救出の活動などを行っている著名なかたで、キリスト者として社会問題とどうかかわってきたか、つこんだ話を聞くことができました。

第四回は、「日本人よ、自信を持ちなさい！」(黒田禎一郎牧師)、および「聖書の人種平等の教えを世界に実現した日本」(久保有政:レムナント出版代表)でした。日本の歴史は、左翼が言ってきたほど悪いものではなく、良い点もじつは多々あったことなどが語られました。

第五回は、山下英次・大阪市立大学名誉教授が「日本列島全体を〈巨大な洗脳の檻〉と化したGHQ——その檻から脱するための解毒剤」と題して、講演くださいました。

日本のいわゆる自虐史観のもとが、占領軍GHQの「War Guilt Information Program」(日本人に戦争への罪責感を植え付ける計画)に基づいたものだったこと、また左翼がのちにそれを利用して「日本は悪い国だった」という観念を広めたことなどをお話しくださいました。

同日、三谷和司牧師(神木イエスキリスト教会)も、「謝罪運動は日本のリバイバルを妨げる—聖書学的視点から」と題し、講演下さいました。

第六回は、ベストセラー『教科書が教えない歴史』等の著者、藤岡信勝(新しい歴史教科書をつくる会副会長)教授に、「自虐史観のルーツ『昭和12年の日中関係史』を検証する」をお話しいただきました。

非常に実証的ながら、わかりやすい解説で、日中戦争は日本側が始めた戦争ではなく、じつは中国共産党の挑発等によって始まったことなどが、明らかにされました。私たちは学校で、こ

うした事実を事実として習うべきと痛感した次第です。

第七回は、当会理事にもなられた富岡幸一郎・関東学院大学教授の「大東亜(太平洋)戦争を肯定できるか——戦後世代のキリスト者の視点から」でした。日本がなぜ開戦に踏み切ったのか、踏み切らざるを得なかったのか、当時の資料などをひもときながら、ていねいに、わかりやすく教えて下さり、感謝でした。

第八回は、再び、西岡 力(当時は麗澤大学教授の「信仰と政治:北朝鮮拉致問題と取り組んで考えてきたこと」)でした。北朝鮮の拉致問題という巨大な社会問題と戦う中で、信仰の役割がどんなに大きかったかを、お話しいただきました。

第九回～現在までの講演会

第九回は、コロナ渦の中でしたので、動画収録のみとなりましたが、手束師が「ベストセラー『反日種族主義』の波紋」と題して、講演下さいました。これは元ソウル大教授の李栄薫(イ・ヨンフン)氏をはじめ、韓国の学者やジャーナリストなどが書いた本で、慰安婦問題、徴用工問題、竹島問題などを実証的研究に基づいて論証、韓国内にはびこる「嘘の歴史」を指摘したものです。韓国内でもこのような本が出版されたことは、本当に喜ばしいことです。

また同様に私も、「日本は悪い国ではなかった！ 衝撃の近代史」と題して、動画を出させていただきました。

第十回は、著名な国際問題アナリスト、藤井巖喜氏が、「真実の日米関係:過去・現在・未来」と題してお話し下さいました。氏は、日米戦争がなぜ起こったのか、また日米関係の今後を見通す鋭い考察など、いろいろとお話下さり、たいへん勉強になりました。

第十一回は、世界に「Hevenese」(ヘヴニーズ)旋風を巻き起こしつつある音楽一座を率い、かつ牧師でもある石井希尚氏に、「日本の心、日本精神とは何か」をお話し下さいました。

明治時代、開国直後の日本に来た西洋人が一体何をみて驚いたのか、そのほか日本精神にまつわる様々な話は、私たちの心をとらえてやみません。日本人として生まれ、また日本でイエス・キリストを信じるようになったことの深い意義を、感じさせられました。

第十二回は、畠田秀生師(当会理事・聖書と日本フォーラム代表)による「日本人へのキリスト宣教のボタンの掛け違い: 故郷を忘れるがまずありきか」でした。

これまでの日本人への西洋式の伝道方法は、いわば「ボタンの掛け違い」のようなもので、間違っていたという話です。日本人には、日本人の歴史や伝統文化をよくわきまえた伝道が大切なのです。

第十三回は、著名な韓国人作家、東京国際大学の呉 善花(オ・ソンファ)教授が、「日韓併合時代の真実」をお話し下さいました。

日韓併合時代は、現今の韓国人がいうようなひどい時代ではありませんでした。じつはその時代に、朝鮮半島は大発展をとげ、日本人も韓国人も仲良く国造りに励んでいたのです。そうしたことを実証的に、わかりやすく説明下さいました。日韓併合時代に実際に朝鮮半島で撮影された写真なども、多く見せて下さり、その真実な歴史が私たちの脳裏に焼き付くものとなりました。

また 2023 年 3 月に、当会と「聖書と日本フォーラム」の合同のセミナーを、京都の関西セミナーハウスで一泊二日で開きました。

聖書と日本フォーラムは、古代史を中心に、古代イスラエル人や東方キリスト教徒たちと日本の関係を研究してきた団体です。一方当会は、近代史を中心に日本と聖書の関係を研究してきましたので、両会の合同により、古代と近代が一つの線につながりました。

古代キリスト教徒=秦氏ゆかりの京都で開かれたこのセミナーでは、久保有政牧師(レムナント出版主幹)、中田 宏氏(聖書と日本フォーラム関東支部長)、畠田秀生牧師(聖書と日本フォーラム会長)、砂川竜一(沖縄つきしろ教会牧師)、杣 浩二氏(神戸平和研究所所長)、氏原稔牧師(当会理事)などが、古代または近代について講演し、多くの方々が集い、盛会となりました。(セミナーの DVD 販売中)

第十四回は、阿羅健一氏(南京戦の真実を追究する会会長)による「いわゆる南京大虐殺はあったのか? なかったのか? 実際にそこで何があったのか?」でした。

阿羅氏は、「南京事件:48人の証言」(小学館)など、実証的で優れた著書のあるかたで、実際

に当時の南京を体験した人々の証言や記録を元に、いわゆる南京大虐殺というものはなかったことを、白日のもとにさらしてくださいました。

当時南京にいた日本兵も、中国の民間人も、ジャーナリストも、大虐殺は誰も目撃していません。占領後の南京は平和で、そのために南京から出ていた南京市民たちも5万人以上帰ってきたほどでした。

しかし虐殺というウソは、当時まず初めに南京在住の西洋人らが広め、のちに中国国民党と共産党による宣伝が加わって、戦後に「大虐殺」という大嘘が言い広められました。これは日本人の自虐史観の中心に置かれている観念ですので、阿羅氏がていねいに解説してくださいましたことは本当に胸のすく思いでした。

また**第十五回**は、砂川竜一牧師(沖縄 つきしろキリスト教会)が、「聖書から見た日本の過去、未来、使命」と題して、沖縄の現状を中心に、これからの日本はどうあるべきかとお話してくださいました。

いま、沖縄を中国化させようとする動きが顕著にみられるという、憂慮すべき事態が沖縄内に進んでいるということがあり、「今そこにある危機」が迫っていることを痛感させられた次第です。

以上の講演会、および今年10月の講演会は、公開許可を頂いた講演の動画のみですが、当会ホームページにてご覧いただけますので、ぜひご覧ください。

今後に向けて

私たち「日本を愛するキリスト者の会」はこれまで、日本人と日本のキリスト教会に巣くう自虐史観を「今そこにある危機」としてとらえ、そのような一方的な歴史観に立った伝道ではなく、客観的で真実な歴史観に基づく伝道を構築していきたいと、このように様々な活動をしてまいりました。

まだまだ日本では、「日本は悪い国だった」という悪玉史観に基づく伝道が、様々な教会で行われている現状があります。それがかえって多くの日本人を教会から遠ざけている、という実状もあります。

今後も私たちは、日本の歴史、伝統文化には良いことも多々あったのであり、いかに神様

がこの国を愛してきてくださったか、その事実を、イエス・キリストの福音と共に、日本人に豊かに伝えていきたいと願っております。



第16回講演会(入場無料・どなたでも)

手束正昭牧師召天記念講演

日時：10月19日(土)
14:30~16:30

場所：東京・お茶の水クリスチャンセンター
411号室(東京都千代田区神田駿河台2丁目1)

席上献金があります。

講演後、質疑応答の時間があります。

①「文脈化のその先へ-『聖霊によらなければ』」

講師：行澤一人 牧師

②「世界一の親日国：台湾 日本統治の善政が発展の基を築く」

講師：氏原稔 牧師

③「日本を愛するキリスト者の会のこれまでの歩みと今後」

講師：久保有政 牧師

2024年度総会のお知らせ

日時：2024年10月19日(土) 13:30~14:00

場所：お茶の水クリスチャンセンター411号室

正会員の方はぜひご参加ください。

発行者 日本を愛するキリスト者の会

編集 事務局長 久保有政

事務局 高砂教会(神澤・小森)

〒676-0015 兵庫県高砂市荒井町紙町1-34

TEL 079-442-4854 FAX 079-442-4878